

特集

図説 産婦人科医のための 臨床遺伝学必修知識I

企画のことば

末岡 浩*

医療のなかで遺伝学的情報が診断や治療選択に多く用いられるようになり、さらにゲノム医療が国会承認され、いよいよ医療のなかにも遺伝子に関する重要性が認められ、現実的に活用の方角性が明確化されました。そのなかで、多くの産婦人科医療においても遺伝学的検査や治療が導入され、産婦人科医も臨床遺伝の専門的知識が求められるようになってきました。分野として周産期領域は妊娠してから児に発生する疾患の診断や、母体管理に関する事例に多く接する診療部門です。生殖医療に携わる産婦人科医は遺伝病や染色体の異数性などに関して着床前診断、流産の診断など遺伝子診断の技術を求められることが多くなっています。また、腫瘍専門医としてはがんにかかわる遺伝子検査や分子標的治療薬の選択などに関する知識が求められるが増えてきています。遺伝子を通じてほかの疾患分野や診療科とのかかわりも発生

しています。これまで確定検査が病理学的診断に基づくものでしたが、遺伝子の情報が用いられる局面も増えてきています。

これらの知識は日進月歩に進化しており、新しい知見を様々な産婦人科医が横断的に学ぶ機会が減ってきていることも課題に感じており、の方も少なくないと思われます。初学者にとっても急速に進む遺伝情報の詳細化と分野の拡大に対応して診療につなげることも必要になってきています。本企画では必修知識として、ご自身の分野外の領域でもわかりやすく学べる図説の書を目指しました。内容が広範囲に及ぶため、2回に分けて出版いたします。今回はその第1部です。深い専門的知識も必要ですが、この特集は初学者や分野外の医師にも理解が深まるようにわかりやすい実務的な書として企画いたしました。本特集が実務臨床に役立つことを願っております。

* Kou Sueoka 静岡社会健康医学大学院大学(教授)、慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター